

藝林史評 ⑥

昭和二十年八月十五日の御決意

数え年で申せば喜寿を迎えられた今上陛下は、本年も八月十五日「全国戦没者追悼式」に、皇后陛下を伴って臨席された。そして「全国戦没者之霊」柱（神道の立場から解すれば神籠かみかご）の前で「さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。……ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願ひ、全国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。」との御言葉を捧げておられる。

これは「昭和天皇の御心」を忠実に承継されての御公務であるが、その御気持には数えて六十五年前の御決意が秘められているように想われる。侍従次長木下道雄氏の『側近日誌』（高橋紘氏編、文藝春秋・平成二年刊）の昭和二十年十一月十三日条に、「東宮の御日誌」から次の八月十五日条が引用されている。

「（上略）今度の戦で我が忠勇な陸海軍が陸に空に勇戦奮闘し、殊に特攻隊は命を投げ出して陛下の御為笑つて死んで行きました。又国民も度々の空襲で家を焼かれ、妻子を失つても歯をくひしばつてがんばりました。このやうに国民が忠義を尽して一生懸命戦つたことは感心なことでした。けれども戦は負けました。それは英米の物量が我が国に比べ物にならない程多く、アメリカの戦ふりが非常に上手だったからです。（中略）それに日本人が大正から昭和の初めにかけて国の為よりも私事を思つて自分勝手をしたために、今度のやうな国家総力戦に勝つことが出来なかつたのです。（中略）」

これからは苦しい事つらい事がどの位あるかわかりません。どんなに苦しくなつてもこのどん底からはい上がらなければなりません。それには日本人が国体護持の精神を堅く守つて一致して働かなければなりません。（中略）これからは団体訓練をし科学を盛んにして、一生懸命に国民全体が今よりも立派な新日本を建設しなければなりません。（中略）

今までは、勝ち抜くための勉強、運動をして来ましたが、今度からは皇后陛下の御歌（疎開学童に賜りたる御歌「つぎの世を背負ふべき身ぞたくましく正しくのびよりにうつりて」のやうに、つぎの世を背負つて新日本建設に進まなければなりません。それも皆私の双肩にかかつてゐるのです。それには先生方、傳育官のいふ事をよく聞いて実行し、どんな苦しさにもたへしんで行けるだけのねばり強さを養ひ、もつともつとしっかりして明治天皇のやうに皆から仰がれるやうになつて、日本を導いて行かなければならないと思ひます。」（四八〜九頁）

当時、学習院初等科六年生であられた皇太子明仁親王（満十一歳八ヶ月）は、「今度の戦」について、これほどの確な御認識と明確な御決意をもつておられたことがわかる。だからこそ、五十年前の御成婚ころより、戦没者（軍民とも）の慰霊にも積極的な取り組みを続けてこられたのであろう。

その一方、昭和四十九年十二月『木戸幸一日記』（東大出版会刊）を御覧になり、「戦前の歴史を批判するのは、歴史家のやることであり、不十分な知識でやるのは良くないと思います。その場にいた人の気持ちはなかなかわからないから、（批判は）無責任なものになりやすい。今後とも原資料は機会があることに見ていきたい。」（蘭部英一氏編『新天皇家の自画像』文藝文庫、平成元年刊、一〇一頁）と慎重な発言をしておられる。このような御期待に応えるべき「歴史家」の責任は、極めて重い。（所 功）